

星と月の語源

永澤譲次

—— 星 ——

支那人が星の事を星と名付けたのは、説文に依ると、萬物の精上りて列星となると云ふ古人の思想から由來したものと説いてゐる。

釋名にはこれと違つた説明を附してゐる。それは星散也、列位布散也と云ひ星が散布してゐる状態から、このやうに名付けたのであると説いてゐる。その何れが眞なりやと云ふに、説文の説明の方が、洵によく古代人の星に就いての觀念を反映してゐるやうである。

我が國で云ふ「ほし」と云ふ言葉の語原は、倭訓栞に依ると、「火石なるべし、神代紀に天ノ安河所在五百箇^{イホツイハムラ}磐石と見えたるは天河の星象をいへり。神功紀に河石昇りて星と爲ると見えしは、無事の譬へながら、石と星との子細見つべし。史記の註に星石也ともいへり」とある。日本釋名には「ほは、ひと通じしは白き也、星は日の光をうけて白し。」と云つてゐる。白石の東雅には「陰陽二神、日神、月神を生給ひしなどいふ事は、見えなれば、星神を生給ひしといふ事は聞えず、天に惡神あり、名を天津甕星といひ、亦名は天香々背男といひしといふ事は舊事紀に見えしかど、其義を闕けぬ。

古語に火を呼びて、ホといふ。ホシとは其光の火の如くなるをいひしに似たり。ホは^ホ火也シは助詞也。又火をホといひしも、日といふ語の轉ぜしと見えたり。」と云つてゐる。

堀秀成の普義字書には「保はホノカ、ホガラカ又は之を縮る義なれば、此二首にて小なるものの極となる則小點の如きものを指て呼び始めたならむ」と云ひ、井口丑二氏の日本語原には「ホは起り出て廣がる意味、シは細く立ちのぼる意味で、兩語が合したものである」と説いてゐる。

因みにアイヌ語では星は上にあるものゝ意味ださうである。又英語のスターは梵語のスツル、即ちまき散らす、と云ふ意味から來てゐると云はれてゐる。

— 月 —

支那で月のことをげつと呼んだのは、説文に依ると「月闕也太陰之精」とあり、又釋名に依れば、「月缺也、満則缺也」と説明してゐるから、月が満月から次第に缺けて行く様を眺めて、このやうに名付けたものであらう。なるほど月の語原を説明するにはよい解釋である。我が國に於て、つきと呼んだ、その起原を尋ねると、諸家の説が必ずしも一致しないやうである。倭訓栞には「つき月は盡るの義をもつて名とす」とあり、新井白石の東雅には「月ツキ、舊説に日に次の義也といふ。舊事、古事、日本紀等共に、先になり神次に生月神と見えて、又其光彩照日。可以配日なども見えれば、舊説の如き其義に合へるなるべし。凡上古の語にツと言ひしは、次の義あり、配の義あり。云々」と云つてゐる。

堀秀成の音義全書には「ツキ、都の音に同なる義あり、支の音に清き義あり、二音とも其例上にいへり。此二音を合せて地上より仰ぎ見て、間に清き形容のまゝを都支と呼び始めたるならむ。然るを月は神代には地球の底に附着て在しものなれば、月に附^{ツキ}の意なりと云説あり。此の説は大三考と云ふものに、日月とも太古に地球よりはなれたるものなりと云新奇の説出たるより來りし説なり。同じことながら月は地球の衛星なれば、屬^{ツキ}の義など云はゞ少しく理めきて聞ゆべけれども、物の名は如此星學上の究理に據り、或は近頃星學者の中にて云ふ開闢説など云ふものに依りて、深く考へて定めたるものならず云々」と云つてゐる。

井口丑二氏の日本語原には「月は附ツキの意、現今月は地球に附いてゐるが太口人は日に附いてゐると考へたから。」と記してゐる。序に松村任三博士の潮原語彙なるものを見ると、燭 tuk, to illumine, a light. こんな風に書いてゐる。

以上種々の解釋があつたが月は盡^{ツキ}くと云ふ意味から來てゐると云ふ考は無理のなさそうな説明である。